

# 介護職員自己評価表

2020年3月16日

事業所名	小規模多機能型居宅介護 小規模多機能前之浜
------	-----------------------

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	1人	
理学療法士	1人	
介護福祉士	5人	2人
実務者研修修了者	1人	2人
准看護師	1人	

※複数資格者含む

## ◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よくできている	なんとかできている	あまりできていない	ほとんどできていない	備考
前回の課題に関する改善	12.5%	34.1%	36.4%	17.0%	

前回の改善計画	対象者の抱える課題に寄り添える支援を目指している。小規模多機能は、機動性が発揮しやすい形態であることから、地域の介護課題に、緊急介入等で積極的に介入することを目指した。一方で、緊急介入は、生活歴・病歴・障害等を把握することが難しいことがあり、地域の介護課題に緊急介入すること自体や、支援についての捉え方や考え方がスタッフ間で異なり、このことがスタッフの負担となっていることがみえてきた。そこで、月に一回のスキルアップ勉強会にあわせて、捉え方や考え方を共有し合う機会を設けることを計画した。それぞれのスタッフが抱える課題を挙げてもらい、多職種で連携できる支援を模索した。
---------	--

前回の改善計画に対する取組み結果	OJTとBS法を用いた内部の勉強会を開催し、その中で、些細なことでも話し合える機会を設けた。特に、ケア会議に、関係する他事業所の出席を求めたことで、課題解決の幅が広がった。支援で把握した情報がスタッフ間で一致しないことについては、ある程度改善されたが、介入が困難となっている対象者の支援については改善はみられなかった。課題は、シフトの関係から勉強会に連続して出席できるスタッフが少なく、単発的なケア会議になりがちなことであった。結果は、議題に挙がった課題のフォローアップが難しく、支援はスタッフ間でバラツキが生じていた。
------------------	--

## ◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よくできている(60以上)	なんとかできている(50~59)	あまりできていない(40~49)	ほとんどできていない(39以下)	合計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	12.5%	25.0%	37.5%	25.0%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	12.5%	37.5%	37.5%	12.5%	100%
SECTION 3	食事について	12.5%	25.0%	37.5%	25.0%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	12.5%	50.0%	12.5%	25.0%	100%
SECTION 5	排泄について	12.5%	37.5%	37.5%	12.5%	100%
SECTION 6	入浴について	12.5%	37.5%	37.5%	12.5%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	12.5%	25.0%	37.5%	25.0%	100%
SECTION 8	服薬について	12.5%	25.0%	50.0%	12.5%	100%
SECTION 9	意思疎通について	12.5%	37.5%	37.5%	12.5%	100%
SECTION 10	行動障害について	12.5%	50.0%	25.0%	12.5%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	12.5%	25.0%	50.0%	12.5%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	緊急介入の必要性を事業所全体で共有する必要があった。希望に応じて「通い」「訪問」「泊まり」を利用できる特徴を活かすには、生活支援員だけでなく看護師・ケアマネを含む全てのスタッフと事前に話し合い、対象範囲についてコンセンサスを形成する必要があった。このことの不足がスタッフ負担につながっていた。特に、訪問看護・訪問リハビリ等との連携に、事業所間で捉え方の違いがあることが分かってきた。現在は、支援の質を維持するために他事業所を巻き込んだ連携を模索している。残念ながら、スタッフの半数は、未だ大きな変化がみられないとしていた。事業所で行う勉強会等により課題共有を目指しているものの、効果は限定的であり、連携する他事業所を巻き込んだ勉強会等を増やすことで、関係性を強化する働き掛けを行っている。
	管理者 桑原 康也

外部評価者	「通い」「訪問」「泊まり」を希望に応じて利用できる多様性が小規模多機能型居宅介護の特徴です。この特徴を活かして、緊急の介入を目指していることは評価できます。一方、このことが介護職員の負担になっていました。緊急介入は、既往歴や生活歴の把握を難しくするだけでなく、支援に関するリスクを高めます。大切なことは、対象範囲だけでなく、介入プロセスを事前に決めておくことです。職員間で検討する必要があります。昨年、課題として挙がっていた認知症ケアに関する不安感は、改善している傾向がみられ、認知症ケアに自信があるとした介護職員が増えています。注視すべきは、二次三次評価に比べ自己評価が低い介護職員が経験年数に関わらず一定数みられたことです。対して、勉強会等を増やし、課題共有を図っておられましたが、改善したとする介護職員は半数にも満たず、変化がみられないとする介護職員も半数程度みられました。これらを見ると、介護職員との関わりは十分とは言えません。シフト都合から時間的な制限があり、全体で行う勉強会の実施は難しいようですので、少人数でおこなう勉強会やミーティング等を頻度を上げて繰り返し行なうなどを検討してください。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。
	〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37番地302 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士 岩崎 房子